# 七部捜

へ 5
4451

へ5
4451
門へ5
4451
巻

序

[illegible]人と助て乗船する[illegible]元年[illegible]
[illegible]七郎桜たる[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
書肆の[illegible]
[illegible]

安永四乙未春三月

[illegible]

吐月

昭和九年九月二八日
購求

寛保二壬戌年十月

吏登遠
蓼太識

わ庵の梅やそこらに散残る
小春哉

一同云　その日

相国風の風流を形容し
け相国の二字を主人その日一部の主意なるべし
なるべしと
言葉を主意なるべしと
云ふ人へ

これは新刷の作りて出しける事ハ速にゆりてまれなく
兵衆ハ程家をも押て粗すとハ風人へちゃけりかるて
ハなしの偏返のゆまえて言ふよきく發句の後門人お粗
〜あ二字く餘て集めくいふ文面見あるべし

一 又同　同集

ゆふしきは山くすたまえし　虚白

田中めくこまんか柳　夜あらん

此わまんか柳を何所よりともや
蓍さしても紛らわしい田のわらり涼瀬しいかなるこまんといふ
女かとてこちや風小あゆるぎ言すとも色とって辞世を網て
風と枝ゝその言れ柳とこまん柳といふて中へ〜もいつ

〜も論義して言ふる〜俳諧といふものはこゝろみるにわ
〜句ゆりてある雑のものはさむしきもおもしろみとあ〜
〜見え〜のあるてなし柳え紛るぬけの〜をもよき集
〜身ゆり文意へも〜時のゆり〜秋はふんよ解
〜し發の〜るの文意よ居り時よ俳諧と言ふてより
つかしめくのいれも言てよいふくといつか魔像して中く
もぬけのくされあもしく見えあへしずあくゆのへ住小ゆる
家の俳諧く

一 又同　同集

遊人の紀家の柳の峡枝

〜ハし宗勝の角く付しけり

美濃の東山に宗祇か水とてありし其上を英雄なりし
土岐の人の化にの松ともしられて是のみ国の方か
戦の東の松宗祇の水と共に今の人のをぬ游をし
妙宗祇水といふは英雄国郡と飛山田丘家御門の縁に
なまり此所の東常縁ハ宗祇に古今伝受の事ありし所
なれハ人あふ和歌と詠をよし く為は常ハ雲の青みあるへし
宗祇も其跡を慕ひ又此所の水をのみしも云々宗祇と白雲
ここに何とも西行のなかしの清水なりしも同じかるや
うかひ夏草の人のうへ何かはしらず共此所も水さへ名高し
旧跡のかくれなきよし俳諧のうへにても古人の眉目にもあり
今又ここの身の此所にてふるやあのの游をなすやうへ

一同

々檜物の辺流点取の勝負にと争ひて其ものまねの宗
逆の句にても肩部とよぶ所からさまにして今人の涼しき
錢にもまけぬと見ゆるも点取の勝負にかゝり選集などに
計りきりて真実風流に抵る人のなかりしもおそろしや
今流にの二三ヶ度

同集

鳥識まで名にしもの国のとむかし
けるを来りすまりてや
芸をよりあらの名て在る人は富士に向くいかに古への名をなれ
いふくてふ此の古今のこんと為りて約束を取ると
こかりの亀の甲によろしく遂くさつたくしとけ世の事を

と雑の卦四つ五行の卦と易道にあてゝいふさけなくん
ゆふまへて高繊ハ寓言より、つくりの花にして
かすいあまり亀の甲煎るる六つまぬもふるき此の時こそ

同集

ゆくられさみ継すもとけし時雨
秋水一斗もりつくす夜ぞ

師云之丈後曲節の品あし継々云字く盛めて移の夜長な
さらと継て水一斗ハ漏刻とおもひけのくまへて夏ふ思
と附雨の降かゝすもしもせくしつるや我言も知
るふ牡丹とすまるののかくやけしく牡丹是我もまれの前
いはして由来くゆふふ及ぬはかゝかわらも折言ハ首日

その通てしも徒けの人ハかゝぬかい夏ハゆるぬけの人翁の
俳諧もふるや炭俵あてらハ此脇の媚と持白ふんを深
めのさてのめり

同十七日夜話　同集

初雪やふくしも膝に寄て扉さ
空おふまし入るゆくさ人の舎
雉撃ますてうぬる蝶の旅枕とね
うけらかけ道く車にあけり
鷹も羽翻すも翻新のやかましさらん
枇花くとたくる負波の富

一両握翁ハ二番讀に此格も若かゝきも

菩提ハりつゝ湖の牡丹ニの名く湖つゝ同しき人寒わのまゝ
ふくるりのもとよりおもひつゝく冬の日と湖つゝ春の日
常に夏のゆふべとおもふに続て春の日と附けしものゝ今も見れ
あらく湖らるゝいくらもなかりし
師翁之功つゝくりなくて阿羅野にてはしまりて何ほとにもいひ
て人ことなく阿羅野にてはしまりて何ほとにも
京への肩衣ひとへて機ゆの力にまかせ猿蓑の風情も冬の日
小車の日にくらへつゝ猿蓑にて熟し梅炭俵に
にけるこのの後猿蓑にて熟し炭俵にしての全翁に寂静の流
翁をやしたふ末のいかにもつかへゝ続て炭俵
からく月ねくも末のこれもなしけるにや

此炭俵と申は世にて時々の風雅ニありのすがたもやゝ
かるき方ありて今時の若人ことに猿蓑のちやの貞享
ちやのとよも難ありていかにもをかしき
うつりにむかしのいかにもめでたき事にて同集にもいはれしを
猶よくおもひしるべし

同集
病雁の夜寒に落て旅寝かな
秋深き庵にありて何かする
此句はもと田舎にて旅寝に命あつかひける
旅ねなり
十八日雨降人々集りて又其の日とて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一同さ[illegible]

言さ[illegible]

て[illegible]

新も[illegible]

一同さ[illegible]

言さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一同[illegible]

言[illegible]

根[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ふかき林の下草ちる暁ちかし　紙

やまかけに麓の一筋の蕎麦　長

村くとおもひさかなかめの山の端　紙

谷の戸はたちしき鶯やのとけし　佐

花に帯紐をとひて宿やて庵　長

かへる浮巣かくて春秋　紙

出し日も匂ひ立まへる梅の香　佐

一 回

文花ちりの雲の昼のけしき

同集

一 回

むかし汲む井の浅きわけて

咲くしはいや

言ひかはしかくて紙四方同じ今朝かけて春はの空

味もなくこわさしてかくして立へ汲みてなかれ山辺に出で

こころもこゆるまでかきて「今「のりて山がらし

同じ百蕨刈一巻のまま始入りの前青入り規定あり書もる

春の日こ冬わけもとりのちる梅刈藤はらかれし御家

暗の日さ蕉門の万葉の春の日みこの時の蘇の中の

こゆまでかくいまもなくよき発句

一 參回 春の日

候 ふれ事一の冬かしふ白雲めぐる

秋の和名并かな頌

一 さるめ月

源順か和名抄の異名

一 又同

まくれの月なるへしあやまりて

紀元紀四の分より以唐猫めく

一 同

菩提門の男の髪と唐猫に結ひ四の家の紀の娘丈と門

まて又唐猫の論く天張昔の紀の功をたてたりかるも紀

ら以来便なり

此をもふとしたし集と出てえ人ともつかしさの道して紀結之

むさこし集

亀の甲を彫つる時よ法も有

只斗墨を用ひ染て書

百姓の本解は見えは其の見て

此類の明は銘士よみまてせいとして水にて右分の様よも

菩提経をれ之をりて書す葉ならんとして亀の甲と彫るの

如むかし抑も別も用の次第て枯果くる姿ととして

書きふ動事と定て其のにて上にあらりその人たちへの骨相に

他からすのかな有て

初まて代謹和尚ら行ふて

其花ともあて酒の色到らうに

さも雑なり

同廿三日雪の朝入来水言入り雑談推敲おわりて
夕方過帰宅ゆく賢兄と共に酒会と同門の芭蕉門の
俳諧も多くの句あり一体として洒落風の
作なりとなれども一二ケ所芭蕉も悔
とて改めいろいろ誠人の句
なりとなれども秋の夕くもし
飄軍人かるもきめ石ころ
山里の方は言葉の句とはなり
是程なれども雨もあれども
姫の句山なりとなれども
さて歌詠ゆえ浪の句言葉の句とはなり

ろうとなれども和句なりて一句ふかもさふうれしの句
ふかもるめろうとなれども悔もて一句ふかもさふうれしの句
時雨降りもしもの句
同業
浪文の富士を風美ふ秋の句
花ゆうたるいの句 一組
一四月廿日花ゆうかもゆう四花の用ひゆうの色
芭蕉稽古ゆうくもて句ゆう芭蕉ゆう梅ゆうあるゆう梅
ゆうゆうふもゆう
横義句の花
京梅ゆう一ゆうゆう浪ふゆう

[illegible]

一参回　同業

一はるかに[illegible]の[illegible]

はるの[illegible]書ふ伝教大師[illegible]の八重桜の

科[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一同

あ[illegible]業

[illegible]桜[illegible]

はる[illegible]

[illegible]

[illegible]

一同の[illegible]

[illegible]

灯籠を高麗寺の水の流れの
南に立て死人を焼き所に流れ
寺に流れ来るものと云へり
流の一宿に泊りて明日
の夜へらまでに山に捨て
とあるもの
古歌
師白川に流れ来る
十首の歌あり
らりかへ行くやしほの流れ
の文字と詠じ
洞と流れて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 建毛同

[illegible]

一 同同盧同 [illegible]

[illegible]

[illegible]

日本の書の中ふ

[illegible]

一 蓼同

[illegible]

蓋しるをこそ人の旅の伴さとなり

二番手の銀も果さんと穂にむかふ

此頃の桜が二番手の上ろ家て一番手を逸るゝ二番手

てあらんむしろ穂すなはち論なし　二の字に座して並ふなる

一 番外五回

実の確悟わ回にむかひ何頃をなれや

此身之頃やらんの名残

旨存のあら何頃なれんとつるといふ思ふ頃なれなる

とふやや矢張頃なれやく

稲の氣のしみちつてなき風

氣むのはつめる識は鏡康に

此会西行法師もさしむかひて鏡康に識なる成

鏡康に深岳と余布よかり持ていふ思ひ秋風なりけれん

将くと糁に馬いおもひけるゝ時なる

らうへよ会再なしてむかふ郡に翁章もけてさうてかゝあらぬ

水無月やし網の何をも浮錄

ゐの集君か清に何心をえてゆくて網に今もなく

とへて古郷のさかりころさらひて古郷の精粗の重き

一 同

桜の蕉

広さらひや訪ひゆく路の所

一 蓼回

蓋引しかしも浪飛をゆく

[illegible]

一同

[illegible]

一同 [illegible]

一同 [illegible]

一同 [illegible]

一回

一回

一回

一回

一回

之池本前ふして縁く月の記

一 同

同集

梅のかうの袖入ことはあり

言ゑは縁より簾ゝ梅の簾と入ことあかりかうくをまて

枕のかうへ入見もそとうつしてく縁のこたへ縁もうへく

一 同

同集

穐のゆくもこゝに條くの春くるしも

此文字め月

言ハまくしく檐（カミキ）の言遠なくしいてかしこまるく檐の始まて

須く所まかふに秀の遠せしまたせん今や風まかふ和

こゝろは姫板かくの板に猶くとけて云香のことあるなみ

一 同

春ふ行と行てもかしまりゆり縁ふ入あくしりふ

之限十の月

同集

勝近也前ふくめぬ蘭之所

言ハ国にて萬やのきしかしすけせうぬれと共事まて施よ

そうもしは一門也年もあせ全て秋のあかりかるの姿なり

師云今時のをもういのけとも思ふしるもとかしなくし也

命かうかの所ふく通なく年一く終たくて

かはりくめけ秋る蟲也秋の風

氣の色ふおかの門こなり

みたくひもこの門の話論

みくらひまて繍て飛ぶ蝶かりの何とこあまねく遊ぶ

一 夢同 炭俵集附合

后のわくらいとし流して

癸之の梅沼とつけ花みせか

港の梅屋桂よ也

善之山ありて紀ま由紀す

春まやく白しまゝ咲花の梅澤の雲れ煙ふれる

利生也 渉ゆ居九桂川流のもりとや起ふ参らん

一 同

えそりかこめのく

康のふむ紀や頌ふ 射始形

一 同

善紀丹 解始形 是参形としゆうまえく

炭俵

春也 紀ふ丹波の康も帰りて

けるあゆか

善之よう字ふ国浄う義 得紀ふらくく一の谷のわらう岩

し丹波の山の康深宮ふ言うて行の国山道の端山へうつく

桜よふ一湯の暖まく湯て丹波へ帰うとく能つらも違忘

康す山中まてあふくゆく

享保十九月

道具屋之翁忠廣芭蕉翁の画賛一軸持え来師に証え一覧乃するく

し誉めゆえ済国の秋くり 杉風方へ由来書物之帰書宗か

飛合一枝の句なとおもひ出し一旅に[illegible]し皆始[illegible]

俳諧入し師説[illegible]して古人の骨[illegible]らんとせし

炭俵集出板の比翁[illegible]選てる序文を沾[illegible]しを時の[illegible]

くる千里から此文字と集められ[illegible]潤の序[illegible]

三月[illegible]日[illegible]桃青門[illegible]の今木村氏より[illegible]師[illegible]

識　奥細道　閏墨[illegible]　浴衣

此[illegible]連中待[illegible]香[illegible]

芭蕉入[illegible]桃青門[illegible]の[illegible]の[illegible]と[illegible]

長[illegible]道[illegible]の[illegible]　芭蕉

師[illegible]西[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]一[illegible]の[illegible]

見[illegible]の[illegible]

[illegible]　全

[illegible]の[illegible]の[illegible]文字[illegible]

[illegible]梅の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]風

の[illegible]一[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

二[illegible]良夜の[illegible]梅

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

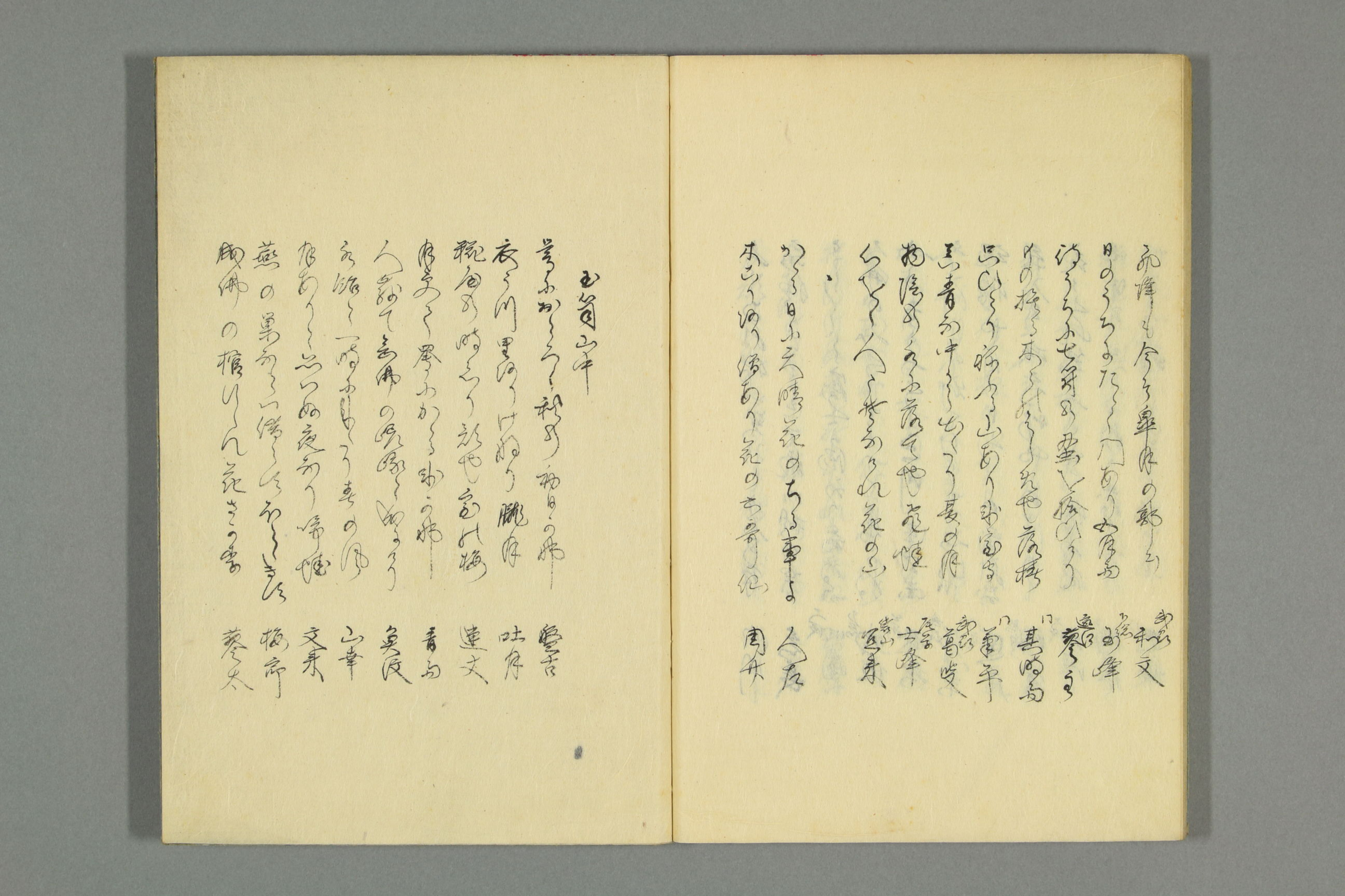
[illegible]

[illegible]

百貫　夜光
乳峯　夜船
杉浦　夜雨
盤中　夜月
如月　夜桜
慎車　夜雨
富士　夜月
風皆　夜雨
鬼我　夜雨
鬼夢　夜雨
鬼秀

夜光　夜月
夜船　夜雨
雷風　夜雨
夢　夜雨
鬼彼　夜雨
花口　夜雨
長枕　夜雨
吐江　夜雨
実牛　夜雨
風見　夜雨
葉経　夜雨

[illegible]　尚美
[illegible]　史中
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

佐國
海松
乃汗
車の内
金葉
忘
言葉
題書
五葉
の中

曲川
高長
長夜
高山寺
沖の石
千載
拾遺
後撰
新古今
蓮の花
蓮の葉
蓮の実
蓮の糸
蓮の露
蓮の池
蓮の水